

万葉の川心

柿本朝臣人麿の死りし時に、妻の依羅娘子の作れる歌

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第二 二二五番歌)

直の逢ひは 逢ひかつましじ 石川に

雲立ち渡れ 見つつ偲はむ

久しぶりに河原にやってきた。草に寝転び、文庫本を読む。本の向こうにきれいな青空が広がる。雲一つない晴天を見てみると、どこからか雲はやってくる。いや、今ここでこの瞬間に生まれたのかもしれない。ちぎれ、流れ、膨らみ、一瞬たりとも留まらない。空の端に目をやると、入道のように膨れあがった雲を見つけた。夏も近い。気になる物語を横に置き、珍しく雲を眺めていた。

柿本人麿は島根県の石見に国司の一員として赴任し、その後、上京のため妻と別れて旅立った。やがて、妻と別れたまま死に際し、帰りを待っている妻を想う歌を遺した。万葉集に、妻の歌が二首並んでいる。「今日帰るのか、今日だろうか」と待っているあなたは、石川の貝に（あるいは、谷に）交じって倒れているというではありませんか。」夫は突然この世から旅立った。もう一つがこの歌だ。「じかにお逢いすることは、もうできないのでしょうか。せめて石川に、雲よ立ち渡っておくれ。それを見ながらお慕いしよう。じかに会えないのなら、空一面に広がる雲にあなたを想い、お慕いしよう。」生前夫は歌った、「山を靡かせ、妻に逢いたい」。妻は返した、「雲よ立ち渡れ、見つつ偲びます」と。人の思いは岩をも通すと言うが、大きな自然を相手に呼びかけるこの二人の心は、直截で、力強く、深く響き合っている。

時代をさかのぼり辞書を調べていくと、「祝う（ハフル・ホフル）」

には次のような四つの意味があることを知った。①鳥が羽ばたき、空に舞い上がること。②雲・波・風が沸き立つこと。③鳥獣を解体すること。④死者を葬ること。どれもが、静から動へ、こなたから空の彼方へ、向こうの世界へと動いていく。そして、何もないところから溢れるように広がっている。鳥獣をほうり、解体すれば、肉が得られ、革製品が得られ、角や骨、毛を使い、恵みがあふれる。漢字が入る前、これらの意味が一つの言葉で表されていた。それが次第に意味を分けて使うようになり、入ってきた漢字も別々の字が当てられていった。そう考えると、雲がとも亡くなった人に近いものを感じられてくる。人もそうだ。何もないとこから、男女が出会い、命をいただいで生まれてくる。日々形を変え、時に成長し、時に失い、やがて一人消えていく。この「二人」がいなければ、命は次につながらない。例えば親子でなくても、あの人に出会わなければ、今は今頃生きていない、今の自分はないという「一人」を、誰ももっているのではないだろうか。そうやってつながって生きていくことをあらためて感じた。



島根県益田市・島根県立万葉公園
人麿呂展望広場・歌碑

万葉集には他にも、巻第十四の三五五番歌に嶺に立つ雲を見つづ偲ぶという歌がある。次に雲を見るときに、大切な人を思い出してほしい。きっと万葉の風が、現代を生きるあなたに吹くことだろう。

